鹿児島市立桜丘中学校
令和４年９月２２日

第６号

親としての「信じる」とは

校長　上久保大介

各地に多くの爪痕を残した台風１４号が過ぎ去りました。被災された方々には心から**お見舞いを申し上げます**。

不謹慎な話ですが、私は子供の頃、台風が近づくとワクワクしたものです。なのに強い風が吹いたり雷が鳴ったりすると、とても怖いものでした。しかし、**父や母が守ってくれるという安心感**からか怖さは和らいだように覚えています。家族を持った今は、様々な心配が増えてできれば避けてほしいと思います。

さて、私には３歳を過ぎた孫がいますが、この子を見て思うことがあります。**幼い子**は初めて見る自分の周りの世界を知りたくて、**何も考えずにどこまでも歩いて行って**しまいます。そこには楽しさしかなく、**危険**がたくさんあることを知りません。親はそんな子に振り回され、**必死に教え、守ろう**とします。

これは中学生も同じです。**中学生**も３歳児とは違うレベルの**好奇心**にかられ、様々なことをしたがります。もちろん**良いこと**もたくさん覚えますが、**悪いこと**もたくさん覚えます。ですから悪いことをしてしまこともあるのです。ただ、悪いことと知ってはいても、**好奇心に負けてしまう**のが３歳児とは違うところです。そのため、**隠しごとも増えて**しまいます。青年期特有のこの行動は、**人として成長している証**でもありますが、この時期、親はどのようにかかわっていけば良いのでしょう。実は「これ」といった確かな方法はありませんが、私の教師としての経験から得た方法を一つだけ紹介します。

し」、最後に「信じる」こと　これはとても単純なことですが、とても難しいことです。これまでの学校でも、**「信じている。」という響きのいい言葉だけ**を並べ、**「何も教えない。確認もしない。」親**がたくさんいらっしゃいました。これは別の言葉で言うと**「放任」**です。うるさいだけの親は子どもにとっては窮屈ですが、信じているだけの親は子どもにとってはだましやすい存在です。子供には**しつこいくらいに「正しく教え」、嫌われることを覚悟で「確認」**し、**最後に愛情を込めて「信じる」**ことが大切だと私は思います。

そういう私も、親としては優等生ではありませんでした。**親としての行動はぶっつけ本番**です。だからこそ、親同士の集まりや話し合いなどのコミュニケーションで学び合うことが必要なのかもしれません。

子供に降りかかる台風対策を**事前に教え**、台風が来ても**正しく対処できるような子**に育てられる親になりたいものです。